

教材:災害エスノグラフィー

平成7年1月17日 阪神淡路大震災

概要

これは平成7年1月17日午前5時46分、阪神淡路大震災により大規模な被害が発生したN市で被災したH氏の状況を記録したものである。

H氏は自宅マンションで被災し、避難所となった公園にキャンプ用テントを張って4カ月間暮らした。避難所では炊き出しをするなどの災害対応を行った。現在は語り部としてボランティア活動を行い、阪神淡路大震災での体験を伝えている。

1. 自分のいた場所が少しずれていたら、ひょっとしたら…

私があ那时候、住んでいたのはFという所で、倒れた高速道路のそばです。10階建てのマンションに住んでいました。あ那时候、ビルのつぶれ方で、真ん中の階がつぶれているところが結構あったのです。うちは、つぶれはしなかったのですが、6階で真ん中の階だったので、やはりすごかったですね。中はミキサーにかかったような状態になって。助かった家具はないぐらい、何もかも全部ぐちゃぐちゃになりました。

私は、家具を全部入れてあった一番危険な場所で寝ていたのですが、家具と家具のすき間で命が助かったみたいで。他の家族は、息子は自分の部屋にいて、子ども部屋にはあまり大きな家具はないので、一番安全な所でした。主人はもうリビングで新聞を読んでいた。そのリビングもあまり大きな家具はなかった。あ那时候は、防災の意識が低かったというか、ほとんどゼロ状態でしたので、今思うと、家具を両脇に入れておくことは、一番危険な状態です。ですから、家具の配置はすごく大事なことだと。

最初に私の上に落ちてきた家具は、和装ダンスでした。和装ダンスはこう前に開く、開き戸が付いていて。その開き戸のところが、最初に私の上に落ちてきて、戸が開いた状態で、それがつかえ棒の役割をしてくれて、すき間ができたのです。ぱーっと揺れたときに、私はとっさに体を丸く小さくクツとなったものですから、ちょうどその空間に入ったのです。

ですから、今思うと、自分のいた場所が少しずれていたら、ひょっとしたら私は死んでいたかもしれません。熟睡していたら、足がなかったかもしれません。ですから、あ那时候命を頂いたと、すごく、ずっと思っています。

2. 再建時の対応

私たちのところは、本当に全壊状態でした。つぶれたビル、マンションを再建するのにも、あ那时候の法律は全員の解体同意書がないと解体できなかつたんです。それがなかつたために、10年、20年とずっと裁判ざたになったところもありました。10年以上崩すことができないところもありました。ごく最初に、解体同意書を全部取らないと、後で再建にあたってなかなか事が進まなくなるというアドバイスを頂いたときに、私たちは、まず全員の解体同

意書をばっと取ったのです。私たちのところは大きなマンションで、全部で 250 軒ありました。残った私たち十何人が分担して、全世帯を探して。外へ行かれる方、避難される方にも、「住所は絶対にここに知らせてください」と徹底したのです。

250 軒分の同意書を役所に持っていったときに、役所の方は驚かれて、「こんなに早く、250 軒もよく取れましたね。」と。そのおかげで、スムーズに再建の活動に入れたのです。私たちも何も知らないまま、知識がない状態で被災しましたので、いろいろな偶然が重なって、アドバイスを頂いたことがすごくラッキーなことだったと思います。

3. 情報を求めて小学校へ

私たちは、避難所という意味も知らなくて。どこにどうなっているか、そのようなことも一切知らなかったのです。私たちがまず避難したのは、車の中です。どこに行っているのか、全然分からなかった。みんな、車の中に避難して。そして情報が途絶えてしまいました。

当然、ライフラインも全部駄目で、私たちの地域では、水道は 3 カ月復旧しませんでしたし、ガスは 2 カ月。電気は一番早かったですが、家がないということは、電気があっても意味がないのです。電気があっても、使えない状況で。

そのときに、小学校が近くにあったので、小学校へ行けば何か情報が得られるかと思って行ってみたのです。そうしたら、私たちの所はマンションやたくさんあって、本当に人口密度の高い所ですから、教室は満員でした。それから、運動場も布団をかぶって震えている人でいっぱいでした。今ここに逃げてきても、もういる場所はないというぐらい、びっちりでした。

見たら向こうにすごく長い行列ができていて、「この行列は何ですか」と聞くと、「今、お弁当を配っている」と言うのです。そのときに私は、「日本は豊かだな。こんな惨状の中で、もうお弁当が来ている」と思ったのですが、今になって考えると、そこは超ラッキーだったのです。多分、たまたまそこに交通ルートがあったのか、たまたま届いたのだと思います。

私たちの所は、家は全壊、ほとんどつぶれていましたから、道なんてどこにあるのか分からないぐらいがれきりで埋まっていました。ですから、救援隊が来るにも来られない状態で、そのときは「何で」と思ったけど、今思うと、通信も途絶え、被害状況も把握できない、道路はあらゆるところで寸断されている、だから外部から入ってこない状態なのです。ですから、私たちも外の状況が分からないし、外の人の中も中の状況が分からない状態でしょう。

小学校に行って、食べる物を配っていますと言われたときに、「朝から何も家族に食べさせていないわ。じゃあ、私も並ぼう」と思って、2 時間ぐらい並んで、やっと小さなおいなりさんが入ったパックを 1 つ頂きました。

4. 「ああ、今日から食べる物がないんだ。どうしよう」

お弁当は一家族に 1 つしかあたりませんと言われたときに初めて、「ああ、今日から食べる物がないんだ。どうしよう」と思いました。そして慌てて駐車場に戻って。駐車場もたくさん車が止まっていて、みんながそこに避難していたので、知り合いに声を掛けて。親子と一緒にキャンプによく行っていた友達が、「Hさん、みんなに声を掛けて、お米を取り出してこ

ようよ」と言ったのです。「そうか、お米か」と思って。ビルは余震でどンドンと傾いていました。中に入るのも怖いのです。ですが、5~6人の方に声を掛けて、「買い置きのお米のある人、持って降りて」と言っています。それで上がっていったんです。

家の中に入ったら、道具が本当にすごい飛びようなのです。6畳2間が続いていて、こちらの端の物が、こちらの端へ飛んでいるぐらいすごい状態になっているのです。私は密閉容器にお米を入れていたので、蓋が開かずに転がっていましたが、「あ、これはいける」と思って、それを持って降りて。お鍋なども拾ってきて。お水はというと、今みたいにペットボトルを保存するようなことは全然できていないですから、破裂した水道管があったので、そこからお水をくんできて。そして、ブロック塀やつぶれている物でかまどを作って、そこでご飯を炊こうということになったのです。

都会のど真ん中ですから、山などから木を拾ってくることはできません。燃やす物だって、もちろん固形燃料などもないし、炭も何もない所ですから。何を燃やしたかということ、つぶれた家の木をもらったのです。つぶれた家の木をもらって、小さな公園でたき火をして、そして、私たちはこちらでご飯を炊いたんです。日頃、キャンプなどでやっていたのが役に立ったのです。

のちのちずっと、私はそこで炊き出しをすることになったのですが、火を扱える人がいなかったのです。今思うと、ですが、火は、紙を燃やして上に木を置いたら多分燃えるだろうと、みんなは頭の中では分かっていると思うのです。でも、それをはたしてたき火にできるか、ご飯が炊けるかということですね。ですから、災害体験を聞きにきてくださった方や子どもたちには、「キャンプへ行ったときには、実際に自分でやってみなさいね」と。自分でやってみないと、頭の中で分かっている、実際にそれをやれと言われると、なかなかできないことなのです。今はみんな、炊き出しなどいろいろなことを防災の勉強のためにやっています。それはすごく良いことだと思います。私たちのときには、そのような知識がまるでなくて。みんな、まさか関西に大きな地震が来るなんて思ってもいなかったですから。そのときに初めて、野外活動の実体験が役に立ったというか。

声を掛けた人の家族だけでもと思って、私たちでお米を持ち寄っておむすびを作っていたら、そこにずらっと行列ができたのです。「ここへ来たら、おむすびがもらえる」と、みんなが思ってしまったのです。何年も先ですが、落ち着いてから後で聞いたら、あのとき、私たちは役所の人だと思われていたみたいです。「ここへ来たら、配ってくれるんだ」と思っていたみたいです。私たちは自分の身銭を切ってというか、自分たちの物で、家族だけでもと思ってやっていたことが、みんなが並んでしまったので、自分たちだけで食べるわけにはいかないので、持ってきた物を全部炊いて配ろうということになって。手がやけどするぐらいにおむすびを作って、みんな配りました。

5. 本当に、温かい物が欲しかった

家がないというのは、本当に何にもないのです。みんな、着のみ着のまま出てきているのです。あの寒いときに、外へボンと放り出されているのです。私なんて、パジャマの上に息子のトレーナーを着ていて。私が震えていると、見ず知らずの人が、「ジャンパーをたくさ

ん持ってきたから、1 個あげる」と言ってもらった、知らない人のジャンパーを着て。みんなそのような状態で外にいるのですから、それはもう暖かいたき火をすると、みんながわーっと寄ってきました。本当に火が欲しかったのです。温かい物が欲しかったのです。私たちが「お湯だけでもいいやん。ここで炊き出ししよう」と言って、私と友達が中心になって、そこで炊き出しを始めました。冬ですから、最初は冷凍庫から飛び出してきた物を拾ってきて、おだしにして、おつゆを作ったりしました。

6. 避難所に指定される

そうしているうちに、1 日か2 日後に、役所の方が来られて、「ここで炊き出しをするのであれば、ここを避難所に指定しましょう」と言われました。そのとき、私たちは、「避難所」という意味も知らなかったのです。知識が何もなくて。避難所に指定するってどういうことかなど。今思うと、避難所という名前があるからこそ、物資が来るのです。ボランティアさんが派遣されるのです。

私たちが公園でいくら協力しあってやっても、そこに避難所という名前がなければ、何も持ってきてもらえなかったのです。そのときには、知らなかったので、「避難所にするのであれば、勝手にして」みたいな状況だった。でも今思うと、避難所という名前を頂いてよかったなど。頂いたからこそ、物資を持ってきていただいたし、ボランティアさんとの関わりもすごく長いこと、いろいろとあったのです。

7. 避難所の公園にキャンプ用のテントを張った

私たちのマンションの小さな集会所がそばにあったのですが、それがつぶれずに無事でしたので、そこにはお年寄りや子どもさんに入っていて。私たちは車の中でしばらく生活していたのですが、これは体に良くないです。キャンプをしている人が「あげるよ」と言われたテントを公園に 4 張りぐらい張った。あぶれた人がそこに入ったりしていました。2 人用のテントですから、私たちは夫婦で 1 つのテント。あと息子が 2 人いるのですが、1 人は集会所の世話役をしていました。もう 1 人は仕事でよそへ行かなければいけなくて。1 人でも生活できる場所へ行くと。ここにいると、すごく心配じゃないですか。食べる物もないし、着る物もないし、お風呂も入れないし。ですから、1 人でも、とにかく生活できる所に行つてちょうだいと言って、行ってもらったのです。息子もボランティアの担当をして、私は公園で炊き出し担当をして。炊き出しをしているから、ご飯のときだけここに取りにきます。そのときだけしか、息子と話ができない。「元気？」と言うぐらいのもので、ずっと離れっぱなしだったのです。家族ばらばら状態ですね。

やはり、テントの生活は大変です。自衛隊のテントのようなしっかりしたテントがあれば、風が吹いても大丈夫ですが、私たちはキャンプ用のテントを張っているのです。2 月ぐらいに春一番が来ますでしょう。それはもう、飛びそうになって怖いですし、雨が降れば中に入つて来ます。ですから、ブルーシートを何枚も何枚も下に敷いて、それをしながらの生活でしたので、テントは嫌だと今、思います。

4 カ月間のテント生活をして、しんどかったですが、そのおかげで体験できないことをい

っぱい体験したので、こうやって語り部をするときに、皆さんにお話しして、役に立てていただけるかなと思っています。

公園では私がずっと火の番をしていました。寝るときは、必ず私が消してから寝ていたのです。男の方々は紛らわせるために飲んで酔うでしょう。酔うと、時間を忘れるでしょう。私は早く帰ってほしいのですが、いつもワヤワヤと2時ぐらいまでいるのです。ずっと無理しなければいけないのです。みんなが避難所へ入って、最後に火の始末をして、私はテントで寝るのです。そのような生活を4カ月。一人一人、仮設に行ったり、マンションを探して出ていかれたり、だんだんとみんなが行ってから、私は最後に避難所をたたんだのです。

今思うに。私たちの避難所は、被災者が運営したのです。ボランティアさんもたくさん来てくれましたが、私たちの避難所に来た人は、必ず2回、3回と来てくださるのです。役所の方が、「ここに来たボランティアさんは、必ずもう一遍ここに来たいと言う」と。何でかなと思うと、被災者が前向きだったような気がするのです。

8. 避難所指定後の運営で大変だったこと・いざこざ

うちの近くには大学もありましたし、小学校も中学校もありましたから、そこへ行っている人もたくさんいました。同じマンションでも、そちらに避難した人もいます。私たちが残っていたのは、私たちは自分のマンションの成り行きを把握しておかないと、放っていったら駄目だという意識がどこかにあったのでしょうか。ですから、そこにいたのです。最初は100人ぐらいで。

避難所に指定してもらったということは、私たちだけがやればいいのかではなくて、この町内全部を仕切ってもらいたいという意識が役所の方にあるのです。物資が来たら、私の息子たちがメガホンを持って、「物資が来ました」とみんなに言って回るのです。一丁目、二丁目、三丁目、四丁目まで。避難所に指定してもらったがために、世話が大変だったのです。いざこざもありました。「何でうちのところに言ってくれなかったんだ」とか、いろいろな摩擦が本当にいっぱいあって大変でした。ここを避難所にすれば、この周りは全部ここに取りにきなさいというような避難所だったのです。

最初はみんな、1週間ぐらいは気持ちがきれいなのです。自分の物を困った人にあげようという気持ちが、1週間ぐらいはある。ところが、物資が入ってきだすと、欲が出てくるのです。一家族に1つというのを、全家族が間隔を空けて並んで、みんな持って帰るとかもありました。それから、周りの人が「あんたここはこれあったけど、うちはなかった」、「お前たちのマンションだけ、ええ目してるんちがうか」「良い物だけを取っているのではないか」とか。「それは私が最初にもらったものだ」とか。いっぱいありました。

みんな公平にしているのです。自分のことなんか除けて、一生懸命にしているのです。ですが、そのように人間の汚いところがばーっと吹き出してくる。こちらから見ていると、同じ人が何回も並んでいて。私たちなんか、ずっと火の番をしていないといけなくて、もらいに行くにも行けないのですよ。ですが、同じ人が何遍も何遍も、物資を持って、車のボンネットを開けて、ばんっと入れて、また並んでというようなこともありました。私たちがこちらから見ている、「あの人とは付き合いたくないね」と言うぐらい。いっぱいありました。

みんな、お酒で紛らわせるし、寒いからお酒を飲まないといられない状況というものもあるのですが、みんなが代わりばんこにどこからか買ってくる。大阪へ行った人が買ってきてみたりするわけです。もうつぶれて売れ物にならない物を「これ、みんなで飲んで」と持ってきてくださった酒屋さんと、売り物にならないのに売っている酒屋さんとかがあったのです。そうすると、私たちはみんな、「今度、私たちが復興したとき、あそこでは買わんとこう」とか、「こっちで買おう」というのがありました。

ああいう切羽詰まったときに、人間性が出てくるから、大事だなと。「損して得取れ」という言葉があるじゃないですか。それだと思いました。

売り物にならないのに売っていたところは、結局つぶれてしまいました。こんなことを言う理想かもしれませんが、自分のことだけを考えるのではなくて、どんなに切羽詰まったときでも、やはり多少、周りのことも考えながら生きていかないと。そうすれば、お釣りが来ると思うのです。

9. 地域みんなはお互いに顔を知らなかった

住民の人は外へ出ていった人が多いです。私たちのマンションの人も何人か残っていましたが、周りのうちの方も公園に来ていました。公園といっても小さいです。公園には、4張りぐらいしかテントを張っていないのです。私たちの小さい集会所が拠点になっているのです。周りには、まだ住める家のある人が点在しています。そのような人たちは、「物資が来ました」と言うと、取りにこられるのです。ですから、私たちのところは、最初は100人ぐらいでした。100人ぐらいが、だんだんと仮設に行ったりして、50人になり、30人になりまして、順番に。私は、最後までそこに残っていたのですが。

私たちの集会所の中にも、マンションではない人も来ていました。炊き出ししていたときに、地域の方もいろいろと手伝いにきてくれていたのですが、そのときに「隣は何をする人ぞ」ではありませんが、みんな、本当にお互いの顔を知らなかったのです。ですから、「このマンションの人はお高くとまって、誰も手伝いやしない」と言う人もいました。みんな顔を知らなくて、地域の方はみんな、自分たちの町内の人が炊き出しをやっている、このマンションの人は、さっさと逃げたしまったと思っていたのです。ところが、炊き出しをして、運営していたのはマンションの人で。それにはさすがに「すみません、私はこのマンションですけど」と言いました。顔を知らないということはこういうことなんだなと。ですから、日ごろ、自治会などでみんなで顔つなぎをきちんとしておかないといけないと、そのときに思いました。もう少し、みんなが地域の顔つなぎができていれば、みんなで協力しあって、この運営もバンともっと早くにできていたと思います。

私はいつも言うのですが、「人とのつながりを作っておいてくださいと言うと、べたべたつながっていないといけないと思うかもしれないけれども、おはようとか、こんにちは、だけでいいですよ。顔つなぎだけをしておいてください」と。名前を知らなくても顔を知っているだけで、「いつも挨拶する人だ」というだけで、何かが一緒にできると思うのです。ですから、語り部のときには、必ずそれを入れるのです。つながるといのは、べたべたつながらなくても、顔つなぎだけしておいてくださいと。そうすると、地域で何かが起こったとき

に、みんなで1つになれるとお伝えしています。

10. 被災者による避難所の運営

避難所では、そうですね、お年寄りや病気の方もいらっしゃいました。私たちがバタバタとしていると、そういう気持ちが出てくるのか、お年寄りの方たちも手伝わなきゃと言って、足を滑らせて骨折したということもありました。

それから病気の方は、同じ集会所でも、管理人室という個室があつて。そこへ入っていたくとか。本当に重病の方は運んでいただかないといけないですから、とりあえず自分の身の回りのことはできる人が、そこに入っていました。小さい子どもさんを持っていらっしゃる方は、親戚を頼って早く出てしまうとか、大阪や京都やそちらの近くにマンションを探して早く移動されるとか、そのようなことをされていました。

被災者が運営するという事は、自立がすごく早いと思うのです。今、大きな学校や大きな施設しか避難所になってないのではないかと思うのですが、私は地域ごとに小さい避難所をたくさん作るべきではないかと思うのです。そうしますと、顔見知り同士で協力しあえて、「みんなで早く自立しようね」という意識が高まっていくし、自立も早い。

神戸のときは、そのようなことが全くなかったですから、すごく長いこと、避難所になった学校などが運営できなくなってしまうでしょう。学校の避難所は、最初の1週間か10日ぐらいであつて、あとは、みんなが運営しなければいけないような避難所を作っておかないといけないと思うのです。やはり、学校の運営の原点は子どもたちですから、子どもたちに早く施設を返してあげないと。被災者ばかりがそこに埋まっていたのでは本来の活動ができない、子どもたちの行く場所がないので、すごくかわいそうな状況になるのです。ですから、親がみんな外に出してしまうのです。学校が運営できないということになると、市外へ全部出たまって、結局、K市の中の住民が少なくなって。市外へ行った人が戻ってくるのに何年もかかるという状況になりましたからね。

仮設住宅は当たりませんでした。あの当時、私たちは家族全員無事でしたから、仮設住宅に当たらないのです。ですから、4カ月間そこで。

私は、みんなが片付いてから、自分が最後にこの公園をきれいにして出ようと思っていたのです。みんなも行く所が決まったとき、私が決まっていなくてみんなが知って、みんなが慌ててマンションを探してくれました。ルートをいろいろと探して。あのときのマンションは、周りが本当に全部つぶれていますから、大阪や他の所に行かなければ、なかなかないのです。ですから、みんなが手分けして探してくださったのです。

11. 8年目にしてやっとあのときの話ができるようになった

あれから8年目に語り部をやろうと思ったのですが、語り部をするときに初めて、家族で震災の話が出なかったことに気がついたのです。誰からも震災の話が出なかった。「あれ?」と思って。「息子が何をしていたか、知らんな」と。自分が親なのに、知らなかったのです。

私もいろいろなことがあったものですから、8年間なかなか元に戻れなくて。語り部をすると言ったときに、友達に「人の前で話ができるようになって良かったね」と言われたので

す。8年目にして。自分ではとっくに元気になっていると思っていたのですが。

上の子に、「今度、語り部をするから。あなたたち、あのときに何をしていたの？」と聞いたのです。すると息子が、「兄弟で近所のおじさんたちと一緒にあって、がれきの掘り起こし作業をしていた」と。私は、それを8年目に初めて聞いたのです。

「うわあ、良いことをしてくれていたんだな」と思って、「人の命を助けてくれていたんだね」と言うと、「お母さん、僕らの住んでいるH区というのは、死者が一番多い所や。がれきの下から生きている人が出てくると思うか」と言うのです。「だから、僕は震災の話はしたくない。思い出すのは嫌」と言うのです。そのとき初めて、「ああ、この子たちにも大変なことがあったんだ」と。

私たちの所の周りは、本当ががれきで埋まっていたから、がれきの所に、「ここに人、1人います」と段ボールに書いてあるのが立ってあったりするのです。そんな所を通りたくないのですが、通らなければ行けない状況で。がれきもすぐには片付きませんから、1カ月、2カ月、放ったらかしの所もありまして。そのような所には、お花が置いてあったり、何かが供えられていたりするのです。そのような所を見たくないのですが、そこしか通る所はないという状況に追い込まれていますから。

私はずっと長い間、記憶の中からお線香の香りが抜け出なかったですね。1月が近くなると、報道がいろいろと言うじゃないですか。その時期になると、ぱーっとお線香のにおいがよみがえってくるのです。ですから、私は本当に長い間、1月17日はずっと家にこもりっきりで、ほとんど外には出なかったです。そのように、やはり、自分では気付かないところに、いろいろな傷が残っているのです。

周りにも、一家全滅したところがありました。そのような所も十年来、ずっと空き地のままです。10年目ぐらいに、やっと家が建ち始めたときに、「ああ、やっと元に戻りつつあるな」と思ったぐらいです。

私たちは家族みんな無事だった。でも、家族全部を亡くした方もいらっしゃいます。今でも語り部をしながら、自然にあのときに戻って行って、涙が出る時がありますね。